

【(4) 授業の展開】

②－4「多くの児童生徒が活躍できる機会を設定している」

《つまずきの背景》

P 自尊感情の低下

《解説》

一人一人の子どもに活躍できる機会が与えられていると、授業に主体的に参加しようという意欲が出てきます。そのためには、1時間の授業の中で一人1回は活躍できる場を設定することが大切です。劇化する、音読を工夫する、バリエーションのある活動を取り入れる、などにより、子ども自身が授業に参加できたという達成感を持つことができます。

学級の中にいる、支援が必要な子どもは、失敗体験を繰り返し、自己肯定感が低下している場合が少なくありません。授業においては、意識してそれらの子どもが活躍できる場を設定し、小さなことでも褒める姿勢が求められます。

音読をさせる場合には、いきなり当てることは避け、子どもが読む順番を予測できるように配慮することが大切です。

【工夫点】

- ・国語（物語文）では、劇化し、登場人物の心情に迫れるようにする。（小 工夫例 33）
- ・一人一文読みを取り入れるなどして、全員が音読する機会を持つようにする。（小中高）
- ・リレー音読や一斉音読、指名音読、暗唱等、教材に合わせて音読させ、みんなで授業に参加できるように配慮する。（中高）
- ・話合いの時間を設けたり、意見や解答を板書させたりすることを通して、授業に参加しているという意識を持たせる。（小中高）

◆工夫例 33 「国語（物語文）では、劇化し、登場人物の心情に迫れるようにする」



《国語「大きなかぶ」(小学校1年生)》

ワークシートを使って気持ちを考えた後に劇化をし、その中で気持ちやせりふを考えさせるようにします。「どんなことを言いながら引っ張ったらよい？」などとその都度言葉を掛けながら劇化を行っていきます。最初は、恥ずかしがる子どももありますが、せりふが少ない役から始め、慣れてくると積極的にでき始める子どもが増えてきます。劇化の際には、最初は教師がお面を用意しますが、自分で作るようにすると、子どもが登場人物になりきることができ、心情を理解することにつながります。教師がマイクを持って言葉掛けをすると、子どもからどんどん言葉が出てきます。自己肯定感の低下している子どもも、慣れてくると友達をモデルとしながら徐々に楽しんで参加できるようになってきます。